

Special Essay

“Fluid Therapy in Hemorrhagic Shock”

臨床研修管理センター

高森 信三

“Fluid Therapy in Hemorrhagic Shock”は1964年にShires T.らによって発表された論文のタイトルです。私が1984年の4月から1年間を東京の病院にて外科研修を行った際に抄読会で与えられた論文ですが、その後手元からなくしていました。今回の原稿依頼に際し、この論文のことを思い出し久々に図書館を訪れ、記憶を辿りやっと同論文を探しました。まず、Pub-medにて思いつくままに、調べてみましたが見当つかず、図書館へ行き1階の書籍を眺めていき、ショック関係の本を探しました。種類が少なかったのが幸いしたのか、“ショックと外傷 - 基礎編 - ”という本に出会いました。この本を借りてページをめくり眺めているうちに、“Shires T.”という名前が目に入り記憶の底から浮かび上がりました。“ショック”、“Shires T.”などで調べていくうちに“Fluid Therapy”そして“細胞外液”と繋がっていき、出典は“Archives of Surgery”であろうとあたりがつかしました。Keyword、出典の目ぼしがつくと、Pub-medで論文を確定するのは比較的容易でした。図書館1階の新書庫にてカビ臭くホコリに塗れていましたが、製本された“Archives of Surgery”1964年Vol. 88を発見し、当該ページを確認、20数年ぶりに論文“Fluid Therapy in Hemorrhagic Shock”と再会しました。

本論文は出血性ショックモデルを用いた輸血、輸液療法について記したものです。出血性ショックモデルに対し、血液+外液(Lactate Ringer)投与群、血液+血漿投与群、血液のみの投与群の3群を比較すると、生存率は血液+外液(Lactate Ringer)投与群が最も良かったと報告するものです。当時より著者らは、手術や出血性ショック時には機能的細胞外液が減少するために細胞外液による水分および電解質補給が有用であることを提唱しています。これは今日の輸液療法の始まりと言って良いでしょう。

1984年に、研修病院の外科医長から”外科やっていくのだったら、読んどいたらいい論文の1つだよ。”と言われ紹介されたものですが、47年も前に発表された論文を今読み返しても中々面白く読めました。さてさて、小生の論文の中にも後年誰かに読んでもらえるものがあるだろうかと思いを巡らせました。

